

盛岡城の史資料には、絵図・写真・絵画・各種文献など、様々な種類があります。その中でも、平面図については、二百年以上機能していた盛岡城の歴史を物語るかのように多くのものが残されており、市では、その分析にも取り組んでいます。

そこで今回は「本丸の機能」という観点から、平面図を紐解いてみたいと思います！

おすえ  
御末

「大奥」の中でも、藩主やその一族の最もプライベートな空間である「奥」と、本丸全体を支える機能を持っていた区域。

東側に本丸門の「御番所」を構え、料理を行う「御台所」や「御料理之間」「竈部屋」、奥医師が詰める「御医師詰所」などが設けられていました。また南側には「局」「湯殿」等、藩の屋敷に仕える女中の生活区域が据えられていました。

天保13（1842）年3月に、正式に『天守』と呼ぶこととされた三階櫓が築かれていたのも、このエリアの南東隅でした。

本丸内は機能面から見て、下図に色分けしたとおり、4つの区域に分類することができます。

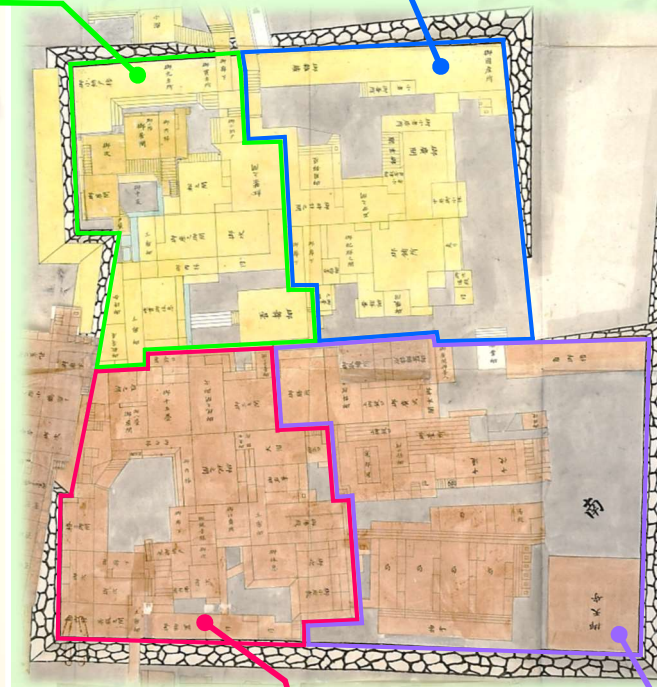
大きく分けると、黄色に着色された北側が、盛岡藩の政務を統括する政庁機能を持つ「中奥」、茶色に着色された南側が、藩主や一族の居住機能を持つ「大奥」となっています。

**そば側**  
「中奥」の政務を総括し、補完する機能を持つ区域。

老中など、主君の身近に仕える「御側衆」が執務を行う一角である「石炉之間」「御用部屋」、中奥と二ノ丸の調理を司る「御膳所」や「御配膳之間」、領内の特産品を取り仕切る「御国産所」と「御雑蔵」などが設置されていました。

※諸室の名称や位置は、時期や図面により変遷があります。

【盛岡城内本丸二ノ丸建物平面図の一部…もりおか歴史文化館収蔵】

なんど  
小納戸

藩主や家臣が藩政に関わる諸事を司る機能を持つとともに、藩主とその一族の身の回りの世話をする「小納戸衆」が詰め、藩主・客人等が寛ぐための機能を備えていた区域。謁見や接待を行う「御座之間」や「松之間」のほか、数寄屋造りの茶室や中庭、能舞台なども設けられていました。

本丸は、盛岡藩の中核的機能を担うとともに、在国時に藩主が寝起きや食事などの日常を営む生活空間でもありました。その場所からは今も、岩手山や南昌山などの美しい自然景観や城下町（盛岡市街）の様子を一望することができます。

盛岡藩の中心であった本丸の地に上り、藩主と同じ風景を眺めれば、そこに暮らした藩主の思いの一端を感じることができるかもしれません。

おく  
奥

藩主や子息女等、一部の南部家一族の居住空間。居室や寝所である「御居間」「御十五畳」のほかに、「御内佛」や「御観音様」のような仏事・神事に関わる部屋、「御祝之間」や「御三之間」などの南部家家中の祝や儀式を行うための格式の高い諸室等が配されていました。

現在復元を検討している二階櫓もこの地区の南西隅に位置し、江戸時代後期となる上記平面図が描かれた頃は、時代とともに徐々に拡張してきた本丸殿舎と、一体的な造りとなっていました。

## 盛岡城小噺

## #町名のルーツ

盛岡のまちづくりは、盛岡藩初代藩主南部信直による盛岡城築城を契機に進められたといわれており、当時の城下町や街道の整備が、現在の盛岡市の中心市街地の基礎となっています。

街道は、城下への往来が多くなるよう整えられ、その周辺には町人街を設けるなど、城を中心とした町割による整理が進められました。

居住地は身分によって分けられ、城の周辺から順に、高知衆と呼ばれる上級武士の重臣屋敷→商人や職人などの町人が住む町家→中・下級武士の武家屋敷→足軽(同心)の屋敷地と配置されます。さらに、領内に点在していた南部氏ゆかりの神社仏閣なども、順次、北山や寺の下の寺社地等に移されることとなりました。

町割が徐々に進む中、その町名についても、武士街は「小路」、町人街は「丁(町)」、足軽(同心)街は「組丁」をつける形で整理されていきます。学校名としても残る「下小路」や『壬生義士伝』の主人公が住んでいた「上田組丁」等の地名は、みなさも聞いたことがあるのではないのでしょうか。

また、「丁」で示された町人街は、居住する人々の出身地にちなんだ町名(三戸丁/仙北丁等)や職業にちなんだ町名(葺手丁/紺屋丁/肴丁等)、そこで市が行われる日にちなんだ町名(六日丁/十三日丁等)などがつけられました。

その名前は受け継がれ、今も様々な形で盛岡の暮らしの中に息づいています。「町名」は、盛岡城が存在していた頃の町の姿を甦らせ、私たちが往時の盛岡へと導いてくれる大切なキーワードです。

盛岡城復元調査推進室の取組の詳細は、市ホームページに掲載しています。

盛岡城に由来があると伝わる資料や建物等に関する情報などありましたら、盛岡城復元調査推進室(019-613-7956)まで、情報提供をお願いします。

